

呉昌碩「臨八大山人画鹿」をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1384

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



呉昌碩「臨八大山人画鹿」をめぐって

松 村 茂 樹

八大山人に傾倒

清末民初の海上派（上海書画壇）領袖として名を馳せた呉昌碩（一八四四—一九二七）は、明の皇族で、宗室の滅亡後、清に降らなかつた書画家・八大山人（一六二六—一七〇五）に傾倒し、友人の諸宗元が呉昌碩の生前に書いた「缶廬先生小伝」⁽¹⁾も、画の模範としたのは、八大山人と、同じく清末清初の石濤のみで、その他は参考にしたにすぎないとしている。⁽²⁾ また、呉昌碩自身も、「效八大山人画」詩（『缶廬別存』所収）小序の中で、

八大真跡世不多見。予於友人処仮得玉簪花一幀。用墨極蒼潤、筆如金剛杵、絶可愛。臨三四過、略有合處。

〔八大山人の真跡は世に多くを見ない。私は友人のところへ「玉簪花図」一幅を借りえた。用墨はとても青みがかったいてうるおいがあり、筆致は金剛杵のように力強く靈妙で、はなはだ愛すべきである。臨摹すること三、四回にして、ほぼ合致するところがあった。〕

と言うなど、八大山人の画を尊重し、臨摹もしていることがわかる。⁽³⁾ よって、次のような画があれば、呉昌碩自身が臨摹

したと思うのもしかたなからう。

画鹿は王一亭の代作

図①は、乙卯（一九一五）春、呉昌碩七十二歳時作「臨八大山人画鹿」である。画中には呉昌碩自筆の題款があり、「鹿叟索臨八大画鹿」とあることから、呉昌碩と親しかった鹿叟、すなわち当時上海随一の日本料亭であった六三園の経営者・白石六三郎（号は鹿叟・一八六八—一九三四）の求めに応じて画かれていることがわかる。また、当時の上海で名声を博していた文墨人士である鄭孝胥（一八六〇—一九三八）、李瑞清（号は清道人・一八六七—一九二〇）の題もあり、李瑞清の方は、「呉倉翁（呉昌碩をさす）画鹿学八大山人者」として、呉昌碩の画であることを前提に書いている（これは題を依頼されて書く以上、当然のことなのであるが）。

よって、この画を挿図として掲げている、韜石「申江潮满月明時—（呉昌碩作品集）編余雜記」（劉海粟 王个簪等編著「回憶呉昌碩」・一九八六・上海人民美術出版社所収）も、「的確な造形、沈着でゆとりある運筆の中にも、彼（呉昌碩）



図①

がまじめに前賢の作品を学んでいるのを見てとることができよう」と記している。だが、実のところこの画は、呉昌碩の弟子・王一亭（名は震、号は白龍山人・一八六七—一九三八）による代作なのである。

この画が王一亭の代作であることは、上海美術館の丁義元氏が筆者との面談中に言

及されたことがあり、その理由は、「筆致が王一亭のものである」というものであった。これについては筆者も全く同感で、丁氏の鑑識眼に敬服したものである。ただ、いわゆる美術史的には「筆致」の差異を指摘すれば十分なのだろうが、客観的証拠があるに越したことはない。

客観的証拠の提示

よって、この画が王一亭の代作である客観的証拠をあげよう。図②をご覧ください。鹿の部分ほとんど同様である。もとより筆致も同一であろう。なにより、画の左には王一亭が「白龍山人王震臨」と書き入れていることから、これが王一亭の画であることは明白である。つまりこの作は、王一亭の画に呉昌碩が賛を書き入れたものということになる。

また、呉昌碩の画賛は、詩一首と識語からなるが、この識語に、



図②

予藏八大山人画鹿、一亭喜其古樸有致、
伸紙臨之、為題二十八字。乙卯孟陬、安
吉吳昌碩。

〔私は八大山人の画鹿を蔵しており、王
一亭はその古樸でもむきあるのを好み、
紙をひろげてこれを臨摹したので、七言
絶句を題する。乙卯孟陬（正月）、安吉
（呉昌碩の貫籍） 呉昌碩。〕

とあることから、呉昌碩が八大山人の画鹿



③ 図

を蔵しており、それを王一亭が臨摹したこと、そして、それが「乙卯孟陬」、つまり図①が画かれた「乙卯春」の少し前（孟陬も春なので、同時期である可能性もある）であることがわかるのである。

さすれば、可能性としては、図②がまず画かれ、次に、その鹿の部分のみを抽出した図①が画かれたと考えることもできよう。

ちなみに、呉昌碩が蔵していたという「八
 大山人画鹿」がどのようなものであったのかはわからない。ここでは参考までに図③として、八大山人「椿鹿図軸」（『芸苑掇英』第十七期・一九八二・上海人民美術出版社 所収）を掲げておく。これに近いものであったのだろうか。

王一亭得意の作

さて、客観的証拠となった図②は、王个簃編選『白龍山人画選』（一九三六・上海孤児院）という線装一冊本の図録に収められている。この図録の奥付には「初版一万冊」とあるので、もともとは稀少本というわけではなかったようだが、今やこの存在を知る人は多くないだろう。筆者はたまたま上海の古籍書店で入手した。題簽は編選者で、呉昌碩入室の弟子として有名な王个簃⁽⁸⁾（一八九六—一九八八）が、封面は呉昌碩の四男・呉東邁（一八八六—一九六三）が書いている。また、王一亭自筆の序文がそのまま影印されて付されており、その末尾部に次のようにある。

えよう。

もう一点も代作

もう一点、呉昌碩の「臨八大山人画鹿」をあげておこう。図④の七十四歳時作「白鹿図」で、「墨美」第十五号（一九五二・書道出版社）「特集 呉倉石」に収められている。

この作も「臨八大山人画鹿」であることは、呉昌碩が題画詩の中で、「呼起雪个（八大山人の字）魂」と述べ、款識の中で「為撫（模）古意」と記していることからわかる。これも基本的には図②と同じ作者の手になることは一目瞭然である。つまり王一亭の代作なのだ。



図⑤

こちらは、図①・②と鹿の向きが違う。もとの八大山人の画も異なるはずだが、どういったものなのか特定できない。よって、これも参考までに、図⑤として八大山人「松鹿図」（汪子豆編「八大山人書画集」第一集・一九八三・人民美術出版社所収）を掲げておく。

それから、この作は、どうやら題款の書も代作らしい。おそらく呉昌碩の次男・呉蔵籟（一八七六—一九二七）の手になるも

のであろう。呉藏龕の「行書扇面」(師村妙石編『吳昌碩四代作品集』・一九九四・吳昌碩芸術研究会 所収)を図⑥として掲げておく。図④の題款は、父の書に似せてはいるが、やはり呉藏龕独自の結構と章法があらわれている。

代作と客観的証拠

以上、吳昌碩「臨八大山人画鹿」をめぐって、気づいたことを述べた。

吳昌碩の晩年において、王一亭は極めて身近な弟子であり、友人であり、パトロンであった。よって、二人してよく通った六三園などでは、共に揮毫することが多くあり、王一亭の代作とは、いわゆる「王画呉題」(王一亭の画に吳昌碩が題款を書き入れた作で、日本人には人気があった)のうち、王一亭の名をあえて表に出していない作と考えた方がわかりやすい。おそらくは、二人と親しかった白石六三郎なども、そういった点を理解していたことだろう。

また、息子の呉藏龕による代作も、他意のないものである。たとえば明末清初の傅山(一六〇六一—一六八四)が遺民となり、生活のため、売字(書法作品を売ること)にあけくれねばならなくなると、息子の傅眉や甥の傅仁が代作を買って出ているが、これと全く同様の、いわば息子として当然の行為なのだ。

代作とは、そもそもネガティブな言葉なのかもしれないが、ネガティブではない代作もあることを確認しておかねばならない。

さて、本稿にいささかの意義があるとすれば、前出『白龍山人画選』を紹介し得たことだろう。代作を論じる際、様式



図⑥

や筆致以外に、客観的証拠が求められることは論をまたないが、客観的証拠そのものが存在しないことがほとんどである。筆者は以前、呉昌碩刻印の呉藏龕による代刻の客観的証拠を提示したことがあるが、本稿でも王一亭による代作の客観的証拠を示すことができた。今後も地道な資料発掘につとめたい。

注

- (1) 諸宗元「缶廬先生小伝」は、一九一四年七月刊行の『南社叢刻』第十集に発表され、呉隱編輯『缶廬近墨』第一集（一九二二・上海西泠印社）巻頭などに転載されている。なお、拙編『呉昌碩談論』（二〇〇一・柳原出版）に全文の日本語訳と解説を収める。
- (2) 原文は、「所宗述則歸墟於八大山人・大滌子、若金冬心・黄小松・高且園・李復堂・呉讓之・趙悲庵輩、猶駢斬耳」。
- (3) その他、八大山人を詠じた詩に「題八大山人画」（『缶廬詩』巻七、『缶廬集』巻三所収）「八大山人鳥石」（『缶廬集』巻五所収）がある。
- (4) 白石六三郎および、呉昌碩との交友については、拙稿「呉昌碩と白石六三郎―近代日中文化交流の側面―」（『大妻女子大学紀要―文系―』第二十九号・一九九七・大妻女子大学 所収）で論じた。また、六三郎に関しては拙稿「六三郎逸聞」（『大妻国文』第二十八号・一九九七・大妻女子大学国文学会 所収）で資料紹介を行った。
- (5) 鄭孝胥と呉昌碩の交友については、拙稿「鄭孝胥日記」に見る呉昌碩との交友」（『大妻国文』第二十九号・一九九八・大妻女子大学国文学会 所収）で論じた。
- (6) 原文は、「準確的造型、沈着鬆動的運筆中也可以見到他認真學習前賢的痕迹」。
- (7) 王一亭と呉昌碩の関係については、拙稿「王一亭にとつての呉昌碩」（内山知也博士古稀記念会編『中国文人論集』・一九九七・明治書院 所収）で論じた。
- (8) 王个移「回憶王一亭」（中国人民政治協商會議江蘇省海門県委員会文史資料委員会編『王个移紀念文集』・一九九三・中国文史出版社 所収）によると、呉昌碩の没後、王个移は、王一亭と日益しに親密となり、毎朝、迎えの乗用車で王一亭の家に行き、共に芸事を研討し、朝食後、勤務先の学校へ向かっていたという。よって、王个移が『白龍山人画選』の編選者をつとめることは、ごく自然なこと

とであつたらしい。

(9) 「王画呉題」については、拙稿「譚少雲 吳昌碩先生を憶う 解説」(前出『吳昌碩談論』所収)で触れた。

(10) 傅山の代作人については、拙稿「傅山の書論」(内山知也監修 明清文人研究会編『傅山』・一九九四・芸術新聞社 所収)で触れた。

(11) 吳藏籟による代刻の客観的証拠は、拙稿「吳昌碩と大倉喜七郎―并せて吳昌碩最晩年の代刻と真刻を論ず―」(『大妻国文』第三十号・

一九九九・大妻女子大学国文学会 所収)で提示した。